

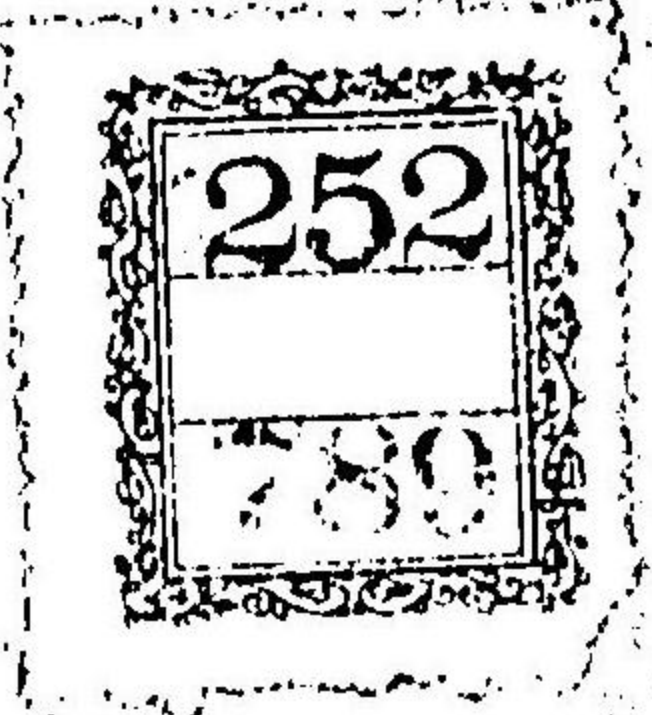
丁-15



土佐藩士

泉州環類舉實記忠義鑑

妙國寺の切腹



緒言

世ニ宣傳スル堺事件ハ吾カ日本國粹ノ花ヲシテ明治元年二月土佐藩士ニ因テ咲クモノト謂フベキナリ盛義モ亦土佐藩ニシテ該ノ事件ニ坐シ十一烈士ト俱ニ國難ニ殉セントシテ助命セラレ今ヤ齡ヒ八十七歳幸ニ健全國事ニ盡悴セリ常ニ謂フ堺殉難十一烈士ハ武士ノ本分ヲ盡シ皇國ノ爲メニ殉死シテ國家ノ禍亂ヲ停止シタル偉勳者ナリ然ルヲ天下ノ人之レヲ誤認シテ一時ノ輕舉暴動ト爲スモノアリ之レ必竟其眞想ヲ知ラザルニ因ルト故ニ明治廿五年三月至リ第九議會ニ對シ十一烈士ノ靈魂ヲ靖國神社ニ合祭シテ英靈ヲ慰センコトヲ請願シ帝國議會ヲ通過セリ土佐藩王山内公並ニ谷將軍ノ義捐金ヲ得テ土佐大嶋岬ニ烈士殉難碑ヲ建設シ尙ホ十一烈士ノ墓所ヲ修繕セリ又盛義烈學實記數千部ヲ著ハシ諸國有志ニ頒布シ又々友人ノ編綴ニ成ル此ノ脚本數万部ヲ製シ諸士ニ頒テ續テ大阪朝日席ニ興行セシメタルニ數十日木戸止タノ盛況ヲ呈シ同席ヨリノ寄附金百圓ヲ以テ十一烈士ノ墓所ニ御影石ノ玉垣並ニ鐵門ヲ建テ又數百圓ノ自金ヲ投シテ堺寶珠院ニ忠烈碑ヲ建設セリ本年ハ即チ十一烈士殉難後四十年忌ニ相當シ盛義生キ殘ル四十年ニシテ獨リ此開明ノ盛世ニ逢フモ烈士今ヤナシ想フテ茲ニ至ル斷腸措ク能ハス依テ紀念トシテ脚本三千五百部ヲ印刷セリ内壹千部ヲ堺ノ寶珠院十一士ノ靈ニ寄付シ殘リ貳千五百部ハ

世ノ仁人義者タルモノ宜シク當時十一烈士ノ壯烈ナル忠死ノ眞想ヲ悉カニシ併テ盛義カ多年辛苦經營シテ死友ニ盡ス熱淚ヲ嘉ミテ競フテ贊成アラシコトヲ謹テ懇請スルモノナリ

明治四十年三月一日

高知縣高知市中島町住士族

士 居 盛 義

八十七歳

箕浦楮之吉源 元章 貳拾五歲
 西村左平次源 氏同 貳拾四歲
 池上彌三吉 藤原光則 參拾八歲
 妻北秀 貳拾貳歲 赤子
 大石 甚吉 藤原良信 參拾八歲
 妻北菊 貳拾五歲 赤子
 杉本廣五郎 源 義長 參拾四歲
 勝賀瀨三六平 稠迅 貳拾八歲
 山本 哲助 源 利雄 貳拾八歲
 森本 茂吉 藤原重政 貳拾九歲
 北代 健助 源 政勝 參拾六歲
 稻田貫之助 藤原相成 貳拾八歲
 柳瀬 常七 藤原良好 貳拾六歲
 橋詰 愛平 紀 有道 四拾歲
 岡崎榮兵衛 藤原重明 參拾六歲
 川谷銀太郎 藤原重政 貳拾六歲
 妻北松 貳拾壹歲

武内民五郎 藤原都榮 貳拾五歲
 横田辰五郎 源 正輝 四拾八歲
 妻北繁 參拾貳歲 子常太郎 拾歲
 垣内德太郎 藤原義行 貳拾壹歲
 土居八之助 越智盛義 四拾八歲
 子盛輝 拾五歲
 武内彌三郎 藤原榮久 貳拾壹歲
 金田 時治 藤原直政 貳拾壹歲
 柿内德太郎 源 義輝 貳拾壹歲
 大監察 小南五郎右衛門 四拾八歲
 御家老 深 尾 鼎 五拾貳歲
 盜賊ノ名
 丹 後 靜 海 五拾歲
 鈴木 代 助 四拾歲

泉州堺烈舉實記忠義鑑

第一

紅葉は枯れて錦と云う武士は死するを忠といふ時勢の事とて是非もなしされば王政復古の
はじめに當て忠臣武士の身を殺し忠義盡すともがらわ其數すべていくはくぞや頃は明治の
はじめつかた徳川十六代の將軍慶喜公いかなる天魔が見入けん君に弓ひく武運の果伏見淀
鳥羽橋本所々の戦争に利なくして盲徒の面々恩願の大名伴ふて東路へこそ消々と胞くも破
れられけるされば兵庫大阪京都所々をかためる官軍の中に泉州堺の津。土州の藩中朝
命に依て。糸屋町へ陣屋と構へ。六番隊長箕浦猪之吉同席には八番隊長西村左平次兵士も
數多居並びて最嚴重に見へにける斯る所へ銀太郎拙者事は御藩中にて川谷銀太郎と申者今
日只今御陣參着兩隊長へ拜謁仕り大悦至極に存じ奉る去りながら万事不調法なる骨者以
後御見しり下さりませうと手をつかゆれば兩隊長いぎをたしいかに川谷今日無事の着陣
満足に存ずしかし其元は只今までは何國におられしを語り玉へハ私事昨年以來は京都在
勤此度高松松山征伐の御人數にさし加へられ兵庫表迄罷り下りし所にはからずも病氣にか
かり御人數に後れしを以て當陣屋へ御配り替へ彼地の模様いで物語らんと居直りて過にし

八日の事なるが土佐藩には京都より朝旨を蒙り高松松山征伐の人数を繰り出す其途中兵庫
おもての事なるが黒けふり。天を焦て遙かの海手。かげはきらめく夷國の軍艦夥しく。波
を蹴破り乗入り来り。天保山の沖合へ瞬く中に錨ををろす其数すべて十六艘此方をさして
漕き来り。なんなく港におし上る。市中の驚き一方ならず上と下への大騒動作法もしらぬ
奴原が我御人数の行先さへざり。無禮の据舞疎忽の狼藉。剩へ兵士の守護せる錦の御旗
理ふ盡にも奪取るふ敵の奴原雲を蔽と逃出すにつくき夷國のひげづらいテ引搦んで糾明せ
んと何れも俱に眼血走り髪逆立追がけ行けき。ふ意の事迫力及はず。無念ながらも詮方な
く。咎を此身に引請て御人数の其中に。武勇勝れし樋口新吉既に切腹にも及ばんとする其
折柄我藩の壯士行かり。御旗を漸々無事に取返したり御油断おられぬ兩隊長と。こふし
を握つて物語る斯る處へ市中の人々申あけます唯今端艇二十艘にて當堺港へ乗り入れ来り
すぐ様上陸致しらんばふ狼藉いたらざるなし片時も早く御取巻を願ひますと元來し道へ引
返へす聞て箕浦いかりを發し今朝も理ふじんに大和橋へ外人數百人立出来り子細如何にと
通辨役に尋ねれば當堺の地理を見分し紀州地迄海岸を測量なさんと答へたり夫は以ての外

の事で御座る我朝廷よりは五港の地の外は外人に入港を許無之依て引返しめされと正理を
以て追ひ返へしたりと云は西村は又候此堺港へ上陸するは如何にもふ審晴やらん。まかる
に唯今官軍は。美濃地へ迄大兵を押し出せり又徳川氏の方の軍師等長州征伐及伏見の兩戦争
に敗北し詮方なさに外人と密約し外人十六艘の軍艦を此地へ乗入れ來數日破船し官軍のす
まを伺ひ居るには相違なしと兩隊長は胸に手をあて考居たる折からへ軍監府より駈け來
り御注進し只今外人本艦より端艇をおろし當堺港へ乗り入れ来り上陸し神社佛閣に亂入
し婦女をどらへて強姦せんとらんばふ狼藉至らざるなし片時も早く出張し取しづめせられ
よと云捨て元來し道へ立歸る兩隊長は扱もにつくき夷國の奴原いで者見せん突立上りヤ
イヤ兵士の面々早く出張の用意くと呼ばればハットこたへて一同が着るや陣笠陣羽織
兩隊長は握る指揮旗れし立て港をさして出て行市中は一同戸を閉ぢ門を鎖し婦女は東西に
逃げ迷ふ其混雑名狀すべからず居合す夷人の數十人に此亂暴を問糺せと通辨なければ言語
通せず然る上は彼れ等一々しはりわけ詰問せんとする場合外ある夷人吾等の守る軍旗を奪
ひ。雲霞海岸向ひにけのびて。直様ぼふとへ飛乗れば。船には水兵したりくと大噓び旗

打ふり吾れに向ひ耻辱を與へたるを吾族持の爲の梅吉章駄天走りに馳け付け付て端艇を引寄せ吾が指揮旗持たる夷人の頭腦を見かけ力に任せて齋口を思ひ切つて打込めば腦骨碎けて死してけり直様其旗取返へさんとする所を其はたやらじとひすどるを雨波の如く打かくる。折からかけくる箕浦西村眼血走り髪逆立旗は軍人の精神なるを其旗渡すな討てくひしめさ下知を下しければ待にまつたる兵士の面々銃先捕へて打かくる中には大太刀小太刀抜きかざしをのれにつくき夷人の黒船切つてく切まくり底の藻屑と致し吳んと云が否や海へさんふと飛込ば流石の夷人もたまりかね。後しら波どにげて行かゝる所へ軍監府杉生駒かけ來り唯今宇和嶋少將より申來るに天保山沖へ外國軍艦十六艘浮べをれば僅かの小勢にて彼に對ふは危き事の候はん一先此地を引あげ朝廷へ奏聞し然る上事をなすこと肝要なれと詞に従ふ一同は軍監府の御命とあれば是非に及すと一ト先此場を引あげんと跡をにらんで土佐屋敷へとひき上げる

泉州堺烈舉英雄の切腹

第貳回

京都智積院の席

爰は京都智積院。土佐の國の太守御病氣に依つて。御養生の御住居。付従ふ面々は一家老深尾鼎大監察小南五郎右衛門。御傍には御簾中數多の姫付従へ上下晝夜の差別なく御介抱に怠りなく。いとるんざんに見へにける頃しも彌生の末つかた奈良の都の八重櫻けふ九重に散りぬる色香。攘夷と聞し武士の。後の様子は如何ぞと。嵐待間の程もなく。御上使の御入りと。取次ぐに今。立出玉ふ。御簾中後に従ふこしもと銘々衣服收めて出向へば。しづく通ふる三條實美。花田の大紋大袖にて上座へこそ着玉ひ。何れも大義くど仰せに楠の前。手をつかへ。御父様には今日の御上使御苦勞に存する夫と容堂御出向の筈なれども病氣によつて立事叶はず夫にのほる楠の前。恐れながら御上使の赴よしなに御執成下さりませと。辭讓の詞を實美打消しア、イヤろりやならぬ。親子の情にからまれ。勿体なくも万乘の天子よりの詔り。をろそかに致されす兎や角と言ひ繕ひ執成杯とは上への恐れ此實美思ひも寄ぬと。突立上りすりよつてイヤナ楠の前又それなる人へ今此實美が物語る一儀有り。後學の爲め言て聞さん早く承はれと。氣色を正し惣して君に仕ふ身は貴儀男

女の別ちはあれども忠義の道は皆一筋まして三代相恩の君に仕身は又格別スハ君の一大事
 と言時には一命をあげうち働くこそ適れ國の大忠臣されば身を蝸蟻擬らへ義を泰山の重さ
 にくらへ死するは武門第一のならばせ其身に取りては過分の仕合せサ一此の道理を辨へ。
 合点せば其後に及んで狼狽さ尾籠の振舞イヤモ一世間の聞へも悪く容堂病氣とあれば是
 非もなし夫れは兎もわれ直ぐに對面得たき次第と聞より楯の前ひさまづき。左様なれば
 御苦勞ながら父上様病間迄イヤれ通り下さりませそれ御案内申上げイヤナコおつぎの侍に
 は別間にて御執成御肝要と氣を付くればハット心得女中は別間の方へ出て行く上使に立た
 る三條實美誘ひ奥へ入り玉ふ斯としらせに容堂公。病の床をすり出で玉ひ漸ふ出で向ひ賊
 に父君には遠路の所へ御苦勞千万略衣の容堂いさ御上使の赴き仰せ聞られ下さりませうと
 平伏せば三條實美上道の赴き余の儀に非らずと懐中より恭御勅定の赴き取出。ねし戴き先
 般御勅使を以て嚴重に仰せ出されじ通り堺表に於て其藩の士佛人に對し暴舉の始末既に各
 國御交際在らせられ候上は公法に依て御所置遊はさるべく思召を以て朝廷へ佛國より五箇
 條を容れられ第一條の義は來る二月廿三日同所に於て執行是れ在るべく就ては東久世前の

少將宇和嶋少將へ仰せつかはさる儀も是有り候。右指揮取計ふへく旨御沙汰候事。一ツ堺
 表に於て佛人を殺害せし者佛國海軍兵隊の眼前に於て二十人斬首すべし第二條殺害に遇ひ
 し士官並びに水夫の家族等扶助の爲として十五万弗土佐候自分ウエヌス船中に來り堺表に
 於て自國人佛人に對し暴行に及し事如何にも氣の毒に存じ候就ては宜宥怒せられ度候との
 赴きを自分申述べられ候事。一ツ申込を其通り承知せられ。事落着する上は。此通行先さ
 離間せし懇親平和の交際を改めて。速に取締らん事望む佛國ミマセス全權ミンストル伊達
 伊豫の守殿と談上るハット計に容堂公重きつむを垂れ玉へば鼎は君の御前に兩手を仕へ
 情けなきは此事平時に起りし事ならず今關東の手始めの戦に夢にも夷狄を敵す時は以の
 外の一大事。味方に取つて此上の當惑や有る軍氣再びよも振るはじ先づ指し當たるは此難
 義是非に及ばず攘夷に及びし者は死を玉ひ後の患ひを拂ふの外なし又箕浦西村兩人の者共
 罪を其身に引請けて暴舉に及し者なれば。命に従ふ士卒共功有つてこそ罪なき道理よしや
 百年の長壽は保つとも天日照さん程は耻辱是より大なるはなく唯儀の爲に死すべし彼等
 が命増えて三代相恩の主君の御爲君臣の情彼等が一身に集り晝夜忘るゝ間もなく只此事を

思ひ苦しむに。斬首と有つてはよも御受けは致すまじ。只此上の御願には武士の本懐に何卒殿より畠國の一札賜はり切腹の儀仰せ渡され下さらば彼等が身に取生々世々の御厚恩君耻かしめらるれば臣死すとは義者の戒め。潔きよく御請け仕りませう智仁に勝れし深尾鼎詞を盡し言上す容堂公。病ふ上身にしむ計りの落涙に小南も詞を次ぎ。誠に御旗は國の魂しい佛奴猥りに市中へ入り込み。神社佛閣を汚し其上に御旗を奪ひ。土足にかけ刺へピストルを放ち我に敵對ふ狼藉の振舞ひ鎮撫の役儀是非に及はず暴舉の手だてに御旗を取りて。奪ひ返すに用捨があるふかサ、ア爰の道理は有りながら。扱も是非なき世の有様御推量の程御上使様只管願はしう存じ奉りますと。思ひ入てぞ願ひける稍有つて實美公ホ、鼎と言ひ五郎右衛門の願ひさる事ながら。猪の吉左平次兩人は所詮遁れぬ者とあきらめ吳上生者必滅會者定離。盛衰榮枯は夢の世の中やハ、コハ有難き父君の御仰如何程の朝命にても國家の爲め吾職分を盡したる限りは斬罪とあつては臣下にして御受けは致すまじ。依て余が合を以て臣下の者は承諾仕るへくよふ申し聞すへし暫時の間御猶豫相蒙申度しと料紙引寄せ墨摺流し胸にありだけ一々にゆがまぬ筆の達筆にさらくと書き認め兩人の前

にさし出し。是こそ余が心を込めし一ツ札なれば。汝等が胸にて渡して呉れよ今一度目通かも赦て遣りたいが。其方共参りなは余が心中通じて呉れよと。萎れ玉へば一同にハット斗りに平伏せば上使も俱に身を背け。暫時詞ばもなかりける果しなれば三條實美問取つては君への恐れ。予は是より館へ歸り。一刻も早やく奏聞せん何れもさらばと立出る後は涙に。主従が見送る姿。見返る涙顔と顔とは。見合せと心に泣て。目に泣ぬ言ぬ心の切なさも早やせくり来る。暮の鐘緒行無情を汲み分けて。涙ながらに出て行心のうちこそせつなけれ深尾鼎。小南五郎右衛門傳手に向てか手車元の褥へ抱きまいらせ御藥御湯と氣を付て。透間の風もいとひつゝ暫の夢や結ふらん。一ト間の此方に楠姫君しをれながらに立出玉へば。續ひて後より。奥女中思ひくゝに立出て。互に顔を見合して暫時詞ばも出ざりしが。楠の前は顔を上げイヤノヲ皆者最前より始終の様子襖の陰にて聞しをや父上の御上使は表向きなれ共。我夫の御病氣思ひやりての御口上此度ふ慮の御難題と言ひ數多の臣下も在る中に國の爲とは言ながら今戦國の其中に武勇勝れし。武士を朝命故に手放して殺さなやならぬ時宜となる。殿様の御心根御病中と言ひまた御全快も遊ばさず幾千万の御心勞殿

の御身を案じられ。身も世もあられぬと聲をも立す泣玉へは。數多の女中俱泣心を汲んで諸袖を絞る袂の雨やさめ。膝に淵なす計りなり始終寢間にて聞入る容堂公我身の上にせまり来て病苦も忘れ颯より襖あらはに押開き奥を始め皆の者余が心中察し呉れよと計りにて御身悶ゆるねん有様傍に宿直の深尾鼎小南諸共立寄つてハ、ア驚入つたる君の御仁心若し御病氣の御障と相成つては悪しかどなん。去りながら左程迄の思召。恐れ入る儀に候得共切腹と決心し相待居る者共へ。今端の際の御名残り。殿の御訓下し玉はらば。生々世々の御厚恩此儀偏へに願ひ奉るど。思ひ入つてぞ願ひけるチ、満足く直様是よりと立がいれば小南れしとめ。先づ暫時く御病中の事なれば万事は臣等に御任せ在つて諸事御忍にてヲ承知くハ、アハット計り彼に向ひヤー々諸士の旁御乗物はやくくと呼はればハット答へて彼方より銀乗物を。恭しく玄關へ昇り据れば。奥方始め。女中共痛はりまいらせ乗物へ御移遊はせは左右に引添ふ小南深尾數多の諸士も一同に。前後に目を付け嚴重に徐づくと昇上れば。寛仁大度の其有様。千里に羽を伸はす其行粧雲に覆はれて出て行

泉州堺烈舉實記

第三

天満宮の件

立出て親や夫トの災難も我身の上に案じられ。池の上彌三吉の妻のお秀土居八之助の二子源吉郎大石甚吉の妻に菊横田辰五郎の一ツ子彦太郎の四人連れ。神に願をかけはやと心せかれて。潮江の流れも清き鏡川傍に齋さし。天満天神の御社の玉垣の根に寄り添ひて。立休らひ池の上の妻に秀一同に相向ひ今日は取分けふはよされた天氣で暖ひ日並にて參詣人も數多有る様子兎角春と言ふものは。人の心も豊になり今日は山遊ひ翌日は野遊び保養がてらの神參りお前様も私も明てもくれても。夫トの身の上。何を云ふても堺と土佐取りとめた噂も聞へず。天神様へ願かけて無事な歸國を見たい者で御座りますナア御一同様左様で御座りますと源吉郎サアお出なされませ先づあなたさまのらイヤ何分にも御男子様から然れば御免下さりませと。後より續く二人の女中。鹽拂らして我身を清め手水鉢にて手を雪ぎ天神様の神前に額を南無天満天神様此度。夫の無失の災難救はせ給へと祈願の傍ら源吉郎斗らずも此度の父上の身にふりかゝる無失災難守らせ給へと祈念のとりから何處よりかは數多のからず聲いまはしく。鳴來る三人は屹度空打眺めアノ鳥す鳴のわるさ。夫との

御前にも願きて御拜をなさんとする場合むらがり来る數多のからす。聲いまわしく鳴
 ぐれば一度ならず二度ならず幾度もなく此御社の邊り鳴渡るは。父上の身の上夫トの身の
 上心元ないくと打しはれて予見へにける。斯ては果じと一同が祝ひ詞に鶴龜くと。あ
 ら直して立歸る途中御門前なる橋の許に一同が辻うら聞んとただすむ所へ三人男來か
 て今度界は大騒動と云う事にて若殿様が俄に上方へお登りあそばされましたが何時れ登り
 の其時は御前の御人數が。御門前を出るとき鎗の穂ささが前むきなるに今度ば後むけにて
 れ登りになりましたか余程ふ吉と見へますナアチソナジヤ此度界は大騒で。夷人の軍艦
 十六艘天保山沖へ乗り入れ來たり勿躰なくも高松松山征伐の錦の御旗を奪ひ取り剩へ土佐
 の固りの界へ來たり大亂はを盡し將また錦の御旗を奪ひ取られ。その旗を取り歸し國の耻
 辱と覺さし者を已に二十人斬罪に所するげなが誠にふ正當の事ではないかとつふやきく
 立歸る後に四人が狂氣の如く身をもたへ。今日の辻うらと云あの鳥鳴の悪さ大殿様は御在
 阪其上若殿様も御出達被遊其折から。たやりの穂ささを後向きに被成御上阪又二十人斬罪

に行はると云ふ今の辻うら殊に殿様の御身の上。父上の身の上。何と此儘歸らりよふか
 と思案を著れて居たりしが。ねもひさだめてたいせんと幸ひ横田の宅も此馬場先に有れば
 一同御思案を致して如何で御座らう然らば左様致ししよト一同打連れ立ち横田の宅へ
 とも行く。門口よりか、様今歸りましたヲ、常太郎かと病間の床より顔上げサアく皆
 ともどもぞね通り下さりませと。せうすれば然れば御免下さりませと。座敷へ通ふればま
 の御挨拶は後にしてさしか、りお咄申たき事は只今界の方より手紙か参いつてたりますか
 源吉郎様とうぞね讀みなされて下さりませ。然れば御免と封ねしきり讀む文体吾等事此度
 二十人死刑の御沙汰被仰付候得共幸ひ兩殿様も御上阪の赴に付所存の有る丈け申上。御聞
 届けこれなき時は一同切腹と。相極め候間どの道にても其許に對面の義覺東なく存候得共
 其許女の手一ツで嘸かし難義するならんとは存候得共時節到來と蹄吳よ。又二ツつには悴
 れ常太郎と養育なし立派に成人可致。又委細の事は後より歸國する仲間の者に傳へ可申候
 決して御前は無用なりと聞て一同暫時詞もなかりしが稍有つて常太郎の母氣も狂乱たどる
 人々の心も元はといへは彼れ等より亂暴夫れになんぞや。無法にも多くの人をむさ

くど。あたら勇士の成敗如何なる事ぞ。口説き娘けば源吉郎死刑とあらば家の断絶
 ね上の大法泣いている場合で幸ひ今夜は浦戸より便船も有様子なれば是より直様上阪
 して。今天下に名高き御仁心深き兩殿様へ後目相續の御願仕らん。いざさらばと立上れば
 二人の女生れ子抱し其儘にひきとめてまづく待下さりませ私共の二人の子は夫との戦
 場へたもひさし其後にて生れたれば。せめては夫に此子の顔見せて案心致させし殊に
 此子が男子ゆへ生れ子なれば後目の願仕らん。いざさらばと御上阪なされて下されませと
 願ひ詞を聞しより。常太郎はねとなく。もふしかく様お二人のおはさんに。兄ひさんが
 堺とやらへお出なら私も御一所にね供致し爺様に對面し殿様へ後目の相續願が致しとふ
 御座りますす。うれしやく年端もゆかぬそなたをば。しらぬ他國へ
 やる氣はなけれどもと様の御身の上ませまりし事なれば。そちの願聞届け遣はさん。と
 を御一同さま手足まといで御座りませをが。ね連れなされて下さりませと頼めば一同
 フい年端もゆかぬに見上た心底加藤左衛門繁氏の一子石動丸。高野へのぼりし例も有り。
 夫れにはねさくねととりませぬ。ね連申さいで何んとしませう。早速御同道致しませう然れ

は御宿へ御歸りあり。直様船へ御發足なされ何角の事は船中にて。御咄仕らん然れば繁
 様と一同が。留守は宜敷頼みませうと。立上れば繁は一同に立向ひ忤れ常太郎も宜敷ね
 頼み申さん。いざ是より御暇仕らんと衰れを殘して出て行首途大事と母ね繁歸まづも源
 吉郎様忤を宜しう頼みませう。常太郎源吉郎様を親兄共思ひ必らず道中にて煩はぬよふ
 して玉はれ。母も今日から鏡川にて水垢離取り。と、様の身の上そなたの身の上百日が其
 間天満宮様へ祈誓をかける程にと言へは源吉郎のならすね娘さば御無用になされ屹度御引
 請申共々上阪仕らん。何分貴方も御無事にてあなたもまめで御發足かゝ様留守して下さり
 ませと名残りを惜しむ暮れの鐘所行無常と告げ渡る衰を爰に殘して立出る

泉州堺烈舉英雄の切腹 第四回 大阪長堀土佐屋敷の内

芳芦の繁も所も灘波津や。西長堀の土佐屋敷世上の噂どりとごの。胸に一物泰然と。勇氣
 挽ぬ兵士の數多居並びて。佛蘭西人を討たる次第。以後の朝命如何ぞ。思案の外なる。
 斯罪に所すへと者と事決り。同役中の閑込に世上の噂も紛れなく流石の同士も打驚と濕り

いること殊勝なれ。並居る中にも一際立土居は一同に打向ひ如何に各愈死刑と相定り斬首
 杯に逢ふなれば。清き心も水の泡。末の世迄も耻辱ならんと言うに一同かたちを改め此度
 の一件は皇國の爲と存じ隊長の指揮に従ひ佛人の亂暴を打懲したる其功は論せずして却つ
 て死刑に所せらるるとは決して承知致されず。噂の通りなれば見苦るしく首打れては赤恥
 晒らすは言を俟ず。何と各々此上は如何成る御所存で御座るなど尋に勝賀瀬進み出されば
 サア拙者が所存逆外には御座らぬ是より直に天保山へたし出し。思ふ存分佛蘭西人を斬殺
 し。我神州の武勇の程。彼赤髮面に思ひしらし其上にて兎も角も仕らん覺悟万一事を仕損
 なばそりや夫迄の運命と。跡。其場に於て潔く打死するも武士の習ひ拙者が所存はかよふ
 で御座ると。いさみ立れば武内もヲ、勇し、最早今夜も丑満ならんが屋敷をひうかにぬけ
 出んイザ各ヲ、一同にと刀追取り突立上れば土居が制してヤレ待れよ各今鉄砲彈藥迄も御
 上へ取り上られ残るは腰間の一刀而已例令怒憤の力在り又は項羽の勇在り逆て彼れは十余
 艘の軍艦を浮へ運轉手足を使ふ如く夥多の大砲小銃ならへ。要害堅固に相守れば飛んで火
 に入る夏の虫却つて死耻ぢさらす道理如何に口惜しき事ならずや常屋敷にも同藩の兵士幾

隊となく取固み居れば我々を安々遁し出す筈なし。達て各々出んとすれば爰に同士の血を
 流す非常の騷動惹起す斯なる時は却て君へ大不忠血氣にはやるは匹夫の勇なり何んと各と
 の一言に胸に手を置く計りなり。杉本は氣色を正し成程土居氏の今の詞尤もなれ共佛蘭西
 船へ打入の義は餘り麗忽なる思ひ立。是非に死すへき我々が命若し打首にてもせらる、時
 は武士たる者の大耻辱モウ此上は是非に及ばず。努斬首を待んより一同潔く刺違へ此座を
 去らす死せば如何と。はやり切つて言ければ土居はつらく思ひ上巡らし我れ、死する
 は豫ての覺悟然れ共。佛人大亂暴を土佐藩士の暴となし夫れに何んぞや佛人の眼前に於て
 斬罪の耻しめを請ると言うは我等而已ならず吾日本の大の耻辱斯る耻かしめを請るより武
 士の違氣地を立て揮むしろ一同割腹して相果てんは如何て御座るふと云へは勝賀瀬實に尤
 如何様各々此義に異論有るへきと愈々評定一決し然らば是より一刻も早く最後いそがんで卒
 各と勝賀瀬三六死を決したる潔白の心は雪や水なす劍を互にぬきも持つて既に斯ふよと見
 へたる打柄始終の様子を立聞く深尾小南駆け來り寄てヤレ早まられなどおしとごめ此度の
 一件に就いては兩殿様にも非常の御しんつう在らせられまた大守様にはわたりから御ふれい

なり御長はつこの儘にして御上阪遊ばされ。御直に佛蘭西軍艦へ御乗込の上彼是の御挨拶在
 らせられたる程の事にて誠に恐れ入たる次第ならずや君耻しめらるゝ時は。臣死すと言
 本分も在れば。今日君の御心を安んじ奉り事平穩に治るは。是偏に臣たる者の職分ならん
 ○依て我君公より重ねて御沙汰の御書付を讀み開すへし。一同拜聴の上有難く御請け致さ
 るへしと懷中より御書付け取り出し。恭しくれし拜き此度堺表の事件は即今各國御交際御
 一新在せられ候折柄に付き公法を以て御所置仰付られ明日堺表に於て切腹仰付らるゝ旨御
 沙汰是あり候條何れもには皇國の御爲と存じ込み有難く御請け仕るべく候但し歴々御役人
 且つ各國公使も罷り越候上は皇國の士氣各國に相顯候様覺悟有るべく候以上と。讀み終
 れば皆々ハット頭をさげコハ有がたき御書而皇國の御爲と在つて切腹仰せ付らるゝ段戰場
 に於て。君の馬前に打死するも同様武士の面目此上や候へき。段々の御心を添へ是迄死刑
 と疑ひの雲霧も晴れ有難く承知仕る。只此上は君公の御前よりしく御披露願ひ奉ると身を
 へり下つて願ひ入る深尾鼎ホ、早速の承知天晴の覺悟其方共心中察入る人生れて死する
 は當然なれば。君の爲國の爲に一命を捧る和漢の例に引き武士たる者の面目此上やあるべ

きかと言うに小南詞を正し去りながら。忠義拔群一騎當千と言うへき其方共。此度關東の
 先陣にも差立なばさ花々敷合戦も致されんに時も時なりをりもねりあたら勇士を失ふ事
 の残念さよと。ほろりとこぼす涙の露万里に満ちて憐れなり。ア是非もあき次第なり只
 此上は潔きよく立派な最期を遂られよと言うに深尾も詞を添へ我れくは一刻も早く君公
 の御前へ言上致さん一同には今暫時イヤ夫れ幸ひ箕浦西村も常席へ罷り出へき筈なれば。
 逢ふて今生の暇乞も致されよと。立上り並居る諸士に目禮を伴ひ奥へ入にける一ト間の中
 より箕浦西村徐々出る其姿打しめりて座になどり。箕浦は詞を正し如何に各々承はれ
 ば此度皇國の御爲とあつて一同切腹仰せ付られし赴き其責を一身に引受んとぞんじ某西村
 兩人が心盡しも水の泡と。互に顔を見合して。御國の爲とは言ながら。罪なき兵士各迄箇
 程の責のかかるとはア是非もなき有様じやナアと兩眼に涙を浮へ。並居る兵士を打見や
 れば。供にせき來る有難涙落涙と眼蓋ではらひハ、兩隊長の御仁心此期に及んで兎や角と
 最早申上る詞ばもなし。只皇國の御爲とある以上は心涼しく切腹致し。我君公の御心を安
 んじ奉らんと一同が死を決したる一言にハ、天晴健氣な各々の心底。只恨らくは夷敵の奴

原。我國の内亂を付込んで充なき怨心を元どなし。ひまもあらばと窺ふ心底鏡にかけて見る如くなれども最早死を賜はりたる上ならば。何と言ん去りながら。時おくれてはあしからん恐ながら。我君へ最期の御暇乞仕らん皆一所にと先きにたち。兵士も俱に身繕ひ山櫻散れを教る花の主。昨日の色香今日失せて。明日の夕邊の嵐待間の世の中や。夢と見て死出の都に手取りいり。せめて生ある其内に。君の御顔今一目いざ諸共にと立出て斯る大和の川超して早差しかかる裏御門。聲をひろめて殿勤に。斯申は箕浦西村以下の者。我君様へ今生の御暇願はん爲人目お忍夜中の推參御前宜敷願ひ入と頭へをさげて頼みける程もあらせず小南五郎右衛門殿の仰せを承り。いとんぎんに出向ひ。何れも願叶ふたればイヤ此方へと有りければハ、ハット一同平伏し案内に打連れしづく伴はれてそ奥にいる一間のこなたに聲有つて。御殿夫へ御出なりと呼はる聲と諸共に。襖左右へとし開らかせ立賜ふ容堂公智仁勇備の御器量皆々ハット斗りにて恐れ入て平伏す。大主一座を見下し賜ひア、何れを見ても若木の花散るが浮世の習ひなるが。ふ便の者やと。御詞深き情けの一言は。身にしみくとしみ渡る大守禱に着賜ひ其方共皇國の御爲とあれば。是非に及ばず

佛人の乱暴は。にくみても猶餘りある事なれども關東の軍さ。今手始めの事なれば此邊篤と推量せよ忠義無双の其方共。無慚と切腹さする予が心底手足を切らるゝ心地やと御目元もうるむ御落涙ハ、臣等が身に餘我君の御仰せ。心魂にてつし有難く存し奉る素より身命は君にささげるが臣たる者の習ひ殊に皇國の御爲とあれば。生前の面目死後譽れ。小南殿御前よろしく願ひ奉ると。こふへを下げて平伏せば。大守つらく聞し召しホ、天晴れの覺悟。忠臣義者箇程の家來を持ちながら思へばふ徳な我身の上五郎右衛門予が心中察して呉れよと御落涙。重きたつむりを垂れ賜へは御尤もと小南も覺へず俱に御落涙の涙だく一同の袖や袂に汗車軸。保ち兼たるはらく涙。肉もくだくる。おもひにて暫時時をぞ移しける又も表に聲有つて。箕浦西村殿以下の面々。受取りの使者。淺野細川兩家より差越し只今御別殿へ參着最早時刻も差せまれば御用意有つてしかるへう存すると言うに小南承はり。聞るゝ通りの次第なれば各々早く御用意致されよ我君には御入有つて然へう存し奉ると箕浦西村も然らば是より別殿へ罷り越。最期の支度仕らんと皆一同に手を支へ我君様には益々御安泰万々御壽命祝し奉りまするイヤナニ小南殿にも幾久しく御忠勤致さ

れよイヤ多暇仕らんど。立のゝればア、コリヤ待て〜と押しめ虎は死しても皮をどどめ人は死しても名を止むナコリヤ立派な最期を相送げよとの御仰ハ、ハット斗に一同が流石君臣一体の今が此世の御名残りを見上れば君も又見下し見返る互ひの名残り流石に猛き武士も思はず胸に突かくる涙を呑みこみ。のみこんで羊のあゆみたど〜と死出の山路へ別けいらんと別殿さして出て行

泉州堺烈舉實記忠義之鑑 第五回 大阪難波道之場

更て行間をあやなし津の國の末白波の難波道夜の持を業とす丹後静海鈴木大助暫時夢を結ふらんふつと目覺し大欠びしかし静海が何んと夜も最早明方に成たればモウ此所に居るも氣味わるなもの夫はとふと何んと後の月十五日長州藩士と土州藩士と未明に出来コリヤ汝等徳川の軍師の三士に頼まれ粟出口へ大なる屋敷をかまへ清水の搬焼を製造する場所と清水の山上とに六百の兵を隠夜毎に出て京藩中を焼拂らはんと爲したる事探穿の上聞とめられ元治元年七月十八日長州の浪士等蛤御門の戦の時京落中は八分通り焼失せたり依て兵

士を當所に置事出来す又此度の戦には上鳥羽より關門迄十二場所にて大勢を以て花々しく戦へども此度は京落中には思ひなし扱は徳川の將士の謀に依つて六百の兵を隠夜る〜京落中を焼拂らひ兵士を置事のならぬよふ企て居るぞと星をさ、れて南無三寶失敗たりと思ふが否や腕を迴せと云聲は百雷のへされと頭上に落ち掛るかと思を問もなく高手小手すぐ細手にしはられて夫より四條磔に引やり出され長州藩が此者は生し置事相ならず首を刎んと立ちのゝりし所土州の藩士が是は徳川の廻はし者なるから生け置て徳川方の計畧を詰問せん殺は急ぐ事ながれど。おしと〜むればしからは土藩が先ばふで有る上は依て貴藩へ渡し申さんと夫より土藩の方へ引とられその上大佛の牢屋へとおこめられ。からすをさざと云いまげて。よふ〜此場をのがれてぞ。天道人をころさぬ世のたどへ。武運にはつきても悪逆長久目山たしと云うものじやないかヲ、ろふじやく〜其上に憎くしと思ふた。土州のやつらも彼の一件のしくじりや此間内はふといもんちやく。とふ〜こんにち中には妙國寺で切腹往生に極まつたまた互の爲大の敵手をぬらさすして往生さすこれこそほんの奇妙頂來南無妙〜の妙窟寺様と云うものじやア、有難い〜ありがた山のほふちんた

んふ、ハ、ハ、ハ、とたのが。悪事も白波の。寄合瀬浪波道向をに何か足音は。夜明の駄賃と點脚やまながら咳拂ひ旅人はそれと見いんぎんに。二人が前に小腰をかかめそつじながらお尋申。堺の方へ参るには此街道を参りましてよふござりませふかと尋ねれば丹後静海シテ堺は何處へ御出で御座りますなアさればで御座ります。泉州堺は妙國寺へ参りまするヤアスリヤアノ泉州堺の妙國寺へ御参詣なればよりやもふれやめになされたがよい。あなた方は御存じもないかは知らねへが今日は妙國寺の境内に於ては土州の藩士が切腹する逆寺中は昨日からの。大騒参詣所じや御座りませぬぞ。左様で御座りまするかア、イヤ私共は其切腹と聞土州藩の係の者。せひ参らねばなりません。聞より二人はびつくりせしが。おどして見んと目を怒らし何と云う切腹する土州藩の御縁りの者じやコリヤヤイ青二才。よつく聞さわがれ。此れは様達の大の敵さじやわいしらぬさ。是非ないが。知つた上はモワ二才も奴を通す事罷りならぬは。命をしくばためへをはじめ其小坊主も。連の女も懐中の物はたるかな事其身ぐるみ。そこねつき出し三拜せらせど。早ゆすり出す強悪無人コリッ詞ひくきに付上り女子供どあなごつて。ささ程よりの雑言過言殊

に懐中の物衣類送も付ねるふは。これ等正しく追剣じやなヲ、知れた事じやはいコリヤ青二才。耳をさらへてよつくさけ。これ様達はナア昔の石川五右衛門熊坂長件にも勝つたどふじ。天下を押領いたす丹後静海鈴木臺輔様じやわい。何と肝が潰りよふがなサツ爰一寸でも動いて見よム、うごいたらなんとするぞエ、最早うぬらに用事はないサア御同道致しませふヤアちよこさいな下主野郎行る、物なら通つて見よ爰一寸もどふさしと兩人左右にたちひらさ。大手をひろげて待かけたり。若手なれども土州の藩中土居八之助が一子源吉郎見事寄るならよつて見よ北辰一統りうの刀の切味請て見よやと。いふより早く一刀サちり抜放しよらば切らんと身がまへたり。二人の強盗氣をいらちヤアはさいたり小わばめ土居八之助が悴れとあれば猶更以て敵の片はれ。不便ながら此世の暇とらしてくれん観念せよと打かかれれば相手は二人こなたは一人右へかばし左りへ拂らひらよふくはつしと火花をちらして戦ひしが源吉郎が切先さするぞく。なき立つれば。あしらいかねて見へければ。静海いらつてヤアね頭を討すなれ助よと又切りある。二人の手下。流石勇氣の源吉郎後に心を置ながら秘術を盡し戦へ共四人を敵に引請て。既に危ふく。其所へ折から來

かゝる二人の武士。物をも云はず後より。賊の奴原取てはねぢ伏せ投とばせはコリヤ叶はぬと。一同か命からく遁てゆくいづくまでもどかけ出すヤア長追めされなわやまらぬら。じゃと申で。につくいとふろく高の知れたる木端とをぞく我々かせいはいせすとも鬼角のかれぬ天の網。まづ夫よりも大事の場所へさしいそく我々イサお別れ申さんと詞はつかへは仰せの如く打捨申さんが。御兩所には。至急の御用とわれは。ねとめ申も返つて失禮なれ共。難儀の場所を御救ひ下されし御傍。御姓名も承はらすては相すみ申さす。某事は土州の藩中土居源吉郎と申者愚父八之助は常所堺事件によつて。今日切腹と承はり。是なるは大石池の上の御家内。同道にて只今妙國寺へとさしいそく途中にて計らすも。先刻のさなんイヤ早是は始めてお目にかゝる。各方拙者義は御同藩の中城淳五郎田丸勇六郎と申者。此度の一件は拙者共も御同様御所置相蒙らんとなせし所。關引によつてさしのふかれたれと。彼の夷人打拂らひは。我々も相共になしたる事なれば。猶重て拙者等兩人を始め。榮田治右衛門横田清治郎。俱に何卒御所置相蒙らんと。其旨願ひ出たれ共。是をた御聞届なき残念と二十士の人々には。何れも今日妙國寺に於て切腹と相極りし上は。拙者

共もせめては最後の有様を見届時宜により所存の筋も御されは。道をいそいでまかり越す途中で御座る。最早時刻もさしせまれは何角の事は道々ね囃申さんサア御同伴什らん然らは御兩所様皆様サア御越なされませと。一同が打連れ立ていとさゆく夢に夢見し心地して冥途の旅ひと此世の道わけへたら有。野邊の露返らぬ。黄泉會者定離愛別離苦を今爰に思ひ定めて出て行後は名にはふ妙國寺。

泉州堺烈舉實記忠義之鑑 第六 ね松道行の件

古里をしばし見捨て立出る。端子をかゝてとほくど尋る人の行末も。翌日は生死の堺なる。後を慕ふて知らぬ道。馴ぬ旅路の草枕。夢め結ばれし。浮事の。紛し髪も其儘にみだれぐるし。世の有様も松はフット立をまり。國許の評判とは事かはり。上方筋は又格別將軍様がたられたとわや。會津桑名かにげたとかやチ、ソレくくる道筋も長州か兵庫の固めの殿重さ又薩州の御人数は大坂表の御手配り。テモマア威勢な事で有は。ナア夫はそふと此堺の津は。土佐の御人数の御かため此間多くの。異人を打拂ひ。それゆへ大阪のね

屋敷へ御引わけに相なりしとの事。それわろろと夫ト銀太郎殿へ。此子を取目にかけてい
 者じや。さふそよらつてをもちどり。川谷様に逢たいものヲくそふじやくと一人言道をは
 やめていそぎ行。痛はしや二十士は。爰を最後の場所なりと。定められたる妙國寺。肥後
 藤州の御人数が三十挺の駕籠に付添ひ。道程三里の其間隊伍をみださずかこ乗物に送らせ
 程なく来る住吉の新慶町に着たれば送り來りし役人共。見るに忍びず爰は當時土佐國の御
 陣屋のありし所にて。知るべの人も有りつらん。かこを休めて所縁の人に。今端の名殘惜
 ませよと下知に隨ひ人歩どもかこをこなたにわかさすゆれば次第に集る市中の人々。外國人
 の暴擧を防ぐは軍人の職務殊に神戸港及び境にて。みばたを取られ是を其儘すてたかは我
 國の大耻ならずや。たうそれくこれを取返し軍人の。職分を盡したる者なれば高名譽と
 云ふべきを御詮議もなく多くの人をむさくくと御成敗とは何事と涙なからのむせひ聲か
 このまどに取りついて。さめくくと泣ければ警固の人も俱に悲歎にくれ居たる。かゝる所
 へ川谷銀太郎の妻のね松がさかかかて。思わす見合す顔とくつかしや我夫がど。とひ
 立つ思ひこなたにもヤレ女房かど顔を見合せと人目の關にへだてられナント思案の其内に

ね松は傍にすりよつてコレもふし我夫銀太郎殿此いふかしき有様を早ふ聞して下さりませ
 と涙ながらに尋ねれば銀太郎ヲ其ふしんは尤なれども數相思の殿様より皇國の爲と有て
 二十士割腹仰せ付られ唯今妙國寺へ參る途中なるぞと聞てね松は氣も狂亂思へはくはん
 にマア夫婦の中の一ト人子を蝶よ花よと樂まんに武士と生れし甲斐もなや今日を限りの夫
 トの命御國の爲なら是非もなし身は八ッ裂の心地すと娘けば猛き川谷も妻子の情を思ひや
 り忍び泣にぞふししづむかゝる所へ役人が名殘の程は察すれども最早時刻もさしせされば
 はやく御立なされかしと呼はればハツト答て立上る現世未來の別れ路は何にたをんよ
 すがもなし泣く別れをおし鳥のつはさもかれしかたはかび多くの人がうちしめり今はい
 かなる悪日ぞ忠義の爲と御國の爲方を盡せし武士を殺すと云は何事ぞと集ひ來りし老若男
 女群を放て泣さけふ泪く一同か雨や霰のふる如く木津川の堤もくつるゝ如なり始終を
 見聞諸役人見るに忍びずいんぎんに。いづれもの御心中はねさつし申名殘のはご。去なか
 ら。最早時刻もさしせされは。ねそなわつてはあしかりなん。いづれ様には御立なされど
 慈悲のなさけに是非なくもハハハット斗に川谷もコリヤお松上つくさけ武士たるものば死

すへきとせに死せざれば死に増る耻辱とや其方は國へ歸り我に成かわり母に孝行成夫悴を成人させ。此子うちに頼むとよ。たもては立派心には。是が此世の名残と目に殘ユレノウ待ても口の内立寄所をへたつる役人。いわぬは云にいやまさり見返り見送り別れゆく影見へぬ迄延上コレノウッしばし待てたべと又延上りイヤくごふ思ひ廻しても今別れては又逢事のならぬ身の上。わらはも俱にと立上り。妾はも俱に自害して死出三途の御俱せんイヤイヤ只今夫トの。ねつしやるには母上に孝行盡し此子を立派に成人させ我なき後のとひ吊ひを。頼むと今端の際の遺言をそむく道理。又二ツには母上にも外にたよる人もなくまた其上に此子をは孤子となすなれば如何なる愛目に逢ふもしれサコリヤとふしたらよかるふナアとイヤくつその事に國へ歸り。母上に孝行盡し又此子を立派に守りたて。成長するが夫へ操ラ、ソナシヤくと立上り名残りたしげに見返りく古里へ。心お殘して立歸へる

泉州堺列擧實記忠義之鑑 第七回 妙國寺に於て二十士割腹の場

爰は名にそふ妙國寺過去現在と未來迄祈伽藍の大庭に。御痛はしや二十士の。忠臣義士の英雄も。身にも因果が巡り來て早切腹の刻限も間近くなるや。かねてより幕打絞らせ正面には外國事務惣裁山科の宮御傍には東久世。宇和嶋の兩少將土州候の御名代には一家老深尾鼎大監察小南五郡右衛門其外淺野細川の重役共居並ぶ中に。佛蘭西よりの檢視には惣督ミンストル手勢引具しいかめしく。座中を見廻す爲体さも憎てらしく見へにけれ次第くは刻限も。おしうつれば。係り役人聲高く。六番隊長箕浦元章同じく小頭大石甚吉八番隊長西村氏朋同じく小頭池の上彌三吉御用意召されと呼ばればハ、ハットこたへて諸共に早や御暇の時節到來一間の内より立ち出て心徐かに打通り。最後の座にぞれし直る。前に進みし箕浦猪之吉恭しく我國檢視に一禮し兼て用意の指揮旗に結びつけたる辭世の一句洋氣を除却して。國恩に答ふ決然豈人言を省り見るべけんや唯大義をして千載に傳へしめば一死元來論するに足らすと。聲高らかに口吟み稍賭肌たしぬけば。覺悟の体殊勝に見へて衰れなり第一番には箕浦猪之吉三寶取つてれしいただき腹くつるげて九寸五分逆手に取りて

ミンストルなば屹度ならぬ。これ佛人につくさやつ我れ今日此處に於て相果るも元來汝
 等が爲めならず。よしこくも吾皇國の御爲と有つて捨る命なるや七度生さかはり。やはの
 汝等か肉をくらはいて置くべきか。見よ、大和男子の腹切様慥かに見よと。眼を血走り
 髪逆たち九寸五分取直し。つかも砕くる斗りにて腹へがごと突き立て引廻はし諸手に
 をつかみ出し。佛人目がけ投げ付ん其形相去も凄まじく見へにける。あはやと驚く介錯人
 振りかざしたる三尺の水の刃雷光石火エいと切込む手の中の手練如何にや狂ひけん。意外
 の浅手に首落す箕浦屹度ふり仰き如何に御介錯何とせられしぞ。静にくと。聲かけられ
 コハ仕損せし残念と又ふり上げて切り付くる。強氣の箕浦大音上げまた死なん静かに
 と。ふりしほる聲諸共氣を焦らたる介錯人大刀取直しヤツト聲かけ。打下したる大刀風に
 惜しや若木の櫻花。はかなく散りし有様は。實に痛ましき限りなり。わくれはせじと西村
 も三賢引寄せたしただき。一首の歌を口吟み風に散る露となる身はいとはねき心にか
 る國の行末。各々さらばと短刀抜き持ち腹十文字にかき切れば心得たりと介錯立向ひ首を
 はつしと打落す池の上は瞬さもせず。佛蘭西人をにらみしが形を改め完爾と笑ひ皇國の爲

に。我身を捨て、こそしげるむぐらの道ひらさせん。大石氏先へまいると言ふより早く
 腹眞一文字に切り裂けば形は如く介錯人首打落すを見定めて。いと物静に大石甚吉襟り引
 明けて撫でさすり。我も又神の御末の種なれば猶潔きよき。けよふの思ひ出と。短刀弓手
 に右手の脇腹に手を添へてがはと突き立下に切り下げ亦脇腹へ引廻はし上にはねたる刃の
 勢ひ目覺ましくも亦潔きよし。血に染む刃れしぬぐい。傍にさし置兩手を張り介錯頼むと
 大音あげ心得切込手の中の狂ひたりけん。くび落す二太刀三太刀打下せご大石はびく共せ
 す首さしのへて尋常の体いらたつ介錯亦も切込む滅多切はかなく首は落にける始終の様
 子目の邊り。見る目せつなき最後のせつなき檢視は屹度見やりつと。瞬もせず座し居たる
 老若男女の差別なく思はずはつと聲をあげ、惜いかな忠臣と聲を放て泣涙だ大和川原に
 水増して堤も崩るゝ如くなり佛蘭西人は最前より顔色かはり。わななくふるい怯さ座にも
 止まらず足摺してぞ扣へ居る又も呼出す聲々に六番隊兵士杉本廣五郎勝賀瀬三六山本哲助
 森本茂吉稻田貫之重柳瀬常七北代健助御用意あれと呼ばればハツト答へて一様に伴ひ立出
 で座に直る。杉本般動に。はばかりながら御係の役人中拙者共七人の者は此世の名残と辭

世の一句。銘々に書き置たれば最後の後にて御一覽下されて御笑ひ草にもと懐より七枚の
 辭世取り出し差おけば役人取わけ打詠め杉本弘五郎源義長皇國御爲となして身をすつる今
 端の胸の涼しさ勝賀瀬三六平の稠迅かけまくも君の御爲とひとすぢに思ひまよはぬ敷嶋の
 道山本哲助源の利雄ちりどろのよしかゝるども武士の底の心はくむ人ぞ汲森本茂吉藤原の
 重政人心くもりがちなる世の中に清き心のみちひらさせん北代健助源の堅勝身命は斯なる
 ものと打捨てとごめはしきは名のみなりけり稻田貫之而藤原の楳成時有て咲ちるとても櫻
 花なにかおしまん日本魂しい柳瀬常七藤原義好魂しいとこ、にとごめて日の本のたけき心
 を四方にしめさんホ、天晴なる各々の嗜み何れも御歴々の御覽にも相備へ申さん御心置な
 く御用意あれハ、我等迎も今端の望み達したれば思ひ置く事更になしと各形改めて御檢視
 の旁さらば御暇任ると銘々短刀追取て。一度にぐつとつき立る及に傳ふ血は瀧津瀬風々ど
 湧き出る唐紅ひの盤の海漂ふ足元踏しめくして後ろに立つたる介錯人太刀風切て振下せば
 見るに自ら暮魂しいも。消る計の佛蘭西人只わなくと立たり居たり恐れ慄さふるへるは
 〇いと見苦るしくぞ見へにけり斯る所へ表の方。周章も馳來る男女表の大門打たたき土州

の藩士中城淳五郎組丸勇六郷令日當所に於て切腹仰せ付けられたる人々へ今生の對面顔は
 ん爲め大石池の上始め土居横田の家内子息も同道致したれば何卒出格の御詮議を以て今生
 の對面の義御取次願ひわけ奉ると呼ばは御門よりも聲高く願の赴き尤なれども最早時刻
 も差せまり箕浦西村以下の人々切腹致し。御檢視の懸々も相詰めたれば。對面は相叶はぬ
 たつてとあれば上への恐れ御遠慮召れと呼はつたり問より中城チエ々残念く今一ト足早
 かりせば。各々方にね逢申さんねをなはりしか口惜しい。と聞は心も取り亂れ氣も狂亂
 に大石が妻は涙にせき上げて。天道様も聞へませぬ。海山遙のぼり來て。卒ぞさ一度我夫
 に逢ふが責ての名残ぐど。思ひし事も水の泡は。早や御最後とはエエ何事ぞと口説き立れ
 ば。池の上の妻のね秀は身をふるはし。ほんに思へば武士の習ひと云へど情けない。たど
 へ夷人を討。進て斯くむざくと切腹の仰せとは余むごい胴慾な。せめて空しき御顔に
 なりと。逢て一言二言の名残りを惜まん爰あけてと。なりも人目もいとひなく。其儘そこ
 にとんと伏し。よその見る目も衰れなり。俱に涙だの土居源吉郎横田常太郎心ならずもせ
 き立つて兩人の者共親の最後に今生の對面何卒御願ひ申さん。ね慈悲で御座る御情けで御

座ると。亦もしかりに打られたれば聲もれ聞いて土居横田扱は。悴れ二人がまゐりしよな
と。飛立思ひ氣はせき立ちアア今對面致さずば死して證なき。此親をよくく大事に思へ
ばこそ百里餘りの海上を遙るく來たか健氣なやつ。責めて今端の際に只一目逢て死たい
なつかしい。うちが心を思ひやり血をはく思ひ親々は斯る孝子をむさく。者をも得言
はす返すかと思へは胸も張り裂く苦しみを。已れの心を推量やしと口には言はねど心の
中ち相と成つたる大門を恨めしげに打詠つ拳をは。握り詰めて忍び泣。漸々に氣を取り
直し聲をひそめてイヤナ横田氏昨夜も大阪の屋敷にて御兩殿様より皇國の御書付を賜は
り其上皇國の士氣各國へ相顯れ候様立派な最期相遂げよとの仰せを蒙り夫に今更年端も行
かね悴に對面し。未練の振舞致せし時は我君へ申譯なく。多くの檢視へ未練比興と言はれ
なば末代迄の耻辱で御座るコリヤモウ對面致さぬがよがるふと存すると言うに横田も感に
たへ。成程十居氏の申さる、通し恩愛のさつなをふり捨て。いざ一所にと最期の場所へい
そぎ行門のそとには常太郎聲聞すまし涙だ皇國を出る時か、機のお詞に百日が其間鏡川に
て水垢離取り天神様へ祈誓をかける。と仰つたが百日は立す共達すにいでんでは。かが様へわ

しや。言はけがなすのへ其祈誓を縮め今日愛にて天神様れいげんわらはし。とと様のれ命
を救ひ玉へ助け玉へコソ手を合せて拜みます。と。もみぢの如く手を合せ。いたいけ盛り
のいちらしさよ余所の見る目も哀れなる。見るに見兼て源吉郎思はず引寄せ抱さしめチチ
よく言やつた願やつた。扱も健氣な幼子と。打守く。憐れ天神地祇神明も御照覽付つて父
上始め各方の無失の難猶此上に源吉郎が一命犠牲に備へん。救はせ玉へ南無大滿大自在天
神様の御威徳を以て奇妙のれいげんわらはし玉へと合掌しふしたがみく一心こらして念
すれは。天も憐玉しの神の御告げの有難さ。ふしぎや雨風すさましく。にはかに雷鳴ひび
き頭への上に鳴り渡り。はためきたらん計りなり人々奇意の思ひをなす。これぞ誠に忠臣
の最期をととむ天滿宮の神験とは後に今思ひしられるコハそも如何にと。ねどろく人々
佛蘭西人は最前より魂しいぬけたる夢中の顔色此有様に。さばく。と式も作法もあらばこ
ろ身は大國の全權を。このふ肩腰打ぬかし。いち足出して大門口こけつまるびつにげて行
く後打見やり小南がサコンく去りながら風雨烈き此体に万便宜もあしければ。いさま
づ法丈へ御入あれと先さにたち各伴の方丈さして入りければ宇和嶋少將後見送り只今佛蘭

西人の歸たる爲体必ず深き子細ぞあらん一ト先づ旅館へ引き取つて此赴き直様朝庭へ奏上し續ひて使者を以て佛蘭西へ向け委細の斷判開かんアアさるにても箕浦始西村十一士の最後の席に流したるアノ血汐をば吾日本の本の旭に色を染むる始め小南には屢敷へ歸へられ此赴き土佐の守へ委敷言上致されよ何れも俱に目禮式禮悠然として立上り。あたりはらせ二人の少將旅館を差して出て行く小南後を見送つて何か心に打うなづき旅館へこそは立歸る

泉州堺列舉實記忠義之鑑 第八回 寶珠院墓前の場

立歸へる苞蕉葉の露の命の墓なくも碎けて爰に大丈夫の忠義の二字に消へ残る白き屍を寶珠院に建る石硯も十一基の數限りなき恨さへ只香典の烟り多と無縁法界とりませて爰へ出て來る二人連れはなしながらに來がりて何んと長助さん御覽しませ此石塔の數も十一基是がアノ箕浦様始め十一人の御待が切腹なされ御死體を埋めた所しや如何に天朝様の御爲と云ながらまた若盛りの御歴々様平時ならば何のよふな御出世もいたさりよふに何を云う

ても亂世の時節仕方がないコリヤマア御残念様と云う者じやないかハ、成程半兵衛さんの言はるゝ通り如何に皇國の爲じやてゝあたら勇士を無慚く殺すと云うはアア是非もなき有様じやナアしかし毛唐人も土佐の御待の切腹にはさぞ膽が潰れたと見へ橋詰様が切腹の座に直るか否や一目散ににげ出した夫故九人の御方は俄に切腹を御差止めアノあれを見やアノ大瓶は右九人の死體を納る筈で有つたさうな斯ふ成て見るとコリヤマ此大瓶は生運様と申さにならぬオオヤンくこちらも夫にあやかるふと二人はかめを撫でさすり已が頭を摺り付けくサアく長助さん是からアノ坊主に願つてはてなされた御士の御遺物なりと見せて貰ふては御座りませぬかムムムそんなら左様にいたしませうかサア御出なされませと打連立て入にける世の中は移り替はれる世の人の身の色はにはへどちりぬるを我世誰ぞ常ならで此世は何日の亡き人の後吊らいて萎くどうちつれ來る二人の女中いわねど知さ腕の内稍々日は西山に漸々と思ひに瘦れ來る松も蔭げは何處の白布に包む面も何となく所縁りの人と見へける後に引添ひ一人の少年幼兒の手を取り立せまりイヤ申大石様の御内室今申も甲斐な事なから切腹と定りし二十人の其中の九人の人々は俄に御助命と相成

たは常々信し奉る天満宮様の御加護御先立なされし箕浦を始め十一人の方々御最期在りしは申も中々涙の種御残念に存じますると云うをね菊がアアコレは又改まりし御挨拶今更何を申ども所詮返らぬ事なれば只何よりも後々の菩提を吊らひ申さん御覽の通りの此姿御推し成されて下さりませとホロリとこぼす露涙アア如何様黒髪を切らるる程の御心匠御痛はしう存じまする某逆も親共か既に切腹と極はまりしに俄に助命とあり夫而已が細川淺野の御兩家へ御預の身分と成たれば何を申も儘ならず先だたれし方々へ墓參致すも責ての心イザ御案内致すで御座らふと萎れながらに徐々しつと墓の前にひざまつき替ると云へど淺間しや儘ならぬ有様じやアアと鐘打ならし手を合せ南無文義院忠源元章居士南無義行院忠現氏同居士以下九士の尊靈頓生菩提南無阿彌陀佛くと唱ふる聲も自から身染みくと堪へ兼たる二人の妻夫の石碑に取りすがりコレ申我夫例令死しても魂は此世に残ると聞なればコレ申我夫様誠に皇國の御爲と在れば是非もなしさず無念の切腹で御座ませう斯成果るも武士の習ひとは云へど情けない責て息ある其中に只一目御目にかゝつて死ぬ事か遙るく尋て来た私の心の程ア何のよふに在らふと思召御留守で生れだ此ぼんはまたぐわん

せはなければ五ツか六ツに成りもせば他所外の子供に見習ひ爺様戀しどさずやさぞ尋ね迷で御座りませう私しは夫がかなしいと口説き欺げれば大石の妻は猶更せさむげく申我夫貴方が常々の御咄にも勇士の戦場へ赴には屍を馬の皮にて包み古里へ歸るか本望と仰たで御座りませうナ一思へば夫が前表か女の淺い心から御武運目出度御歸國と樂しみ待し甲斐もなく思へば果敢ない夫婦中また其上に此子迄親しらすの孤かと思へば悲しいと前後ふ覺に取り乱せば秀も傍に友涙此子に心が残る陰身に付添ひ草葉の蔭から行末も成人させて下さりませコレく新之助をなはなんにも知るまいが喃ふ爺様はコレ此石礮じや程によふ覺へて居やと我子の顔を打守り石礮にはたと身を寄せて前後正体歎きしが漸々に涙を拂らひ南無忠臣光則居士南無忠山良信居士頓生菩提南無阿彌陀佛くと回向に暫時夕暮の鐘も無常を告げ渡る盛輝ふつと心付ヲ、ソレ先日も細川候の御屋敷へ参り對面を願ひし時重役の申さるゝには元祿の昔時淺野長矩公の家臣大石義雄等がふ俱戴天の仇敵吉良義英を討て罪を幕府に待し時細川候に預けられ其後自殺を命せらる万延元年彌生の頃篠を乱して降雪厭はず水戸の良士大脇和七郎運田小一郎有村次右衛門等外十四名幕府の大老伊井直弼

を櫻田門外に要撃して討倒せし時も淺野細川兩家へ預けられし義士二度迄も割腹を命せられ今又貴藩に幽せられ都合三度目なれば万一左様の事有らんも斗られず御對面の儀は相叶はぬとの事故涙を呑んで立歸りしか今亂國の世の中に夷敵の謀に陥りて多數の義士を冗死さすは實にはかななき世の有様。去る二月廿三日妙國寺切腹の場所に於て神の恵に助かりし九士の人々には埋木と成つて朽果るはなんばふか口惜うをはすらん危き國の時節柄拙者も俱に二度細川の屋敷へ參り各方に對面し忠義を上げんと勇み進で申ければ一同はしかれば御俱仕らんと細川さして出て行早黄昏の鐘の音に塙へ歸へる鳥の音もいとと淋し折柄に大小横たへ立派の侍ひ四人連墓前に立わたり見まはしをりよしと黙き囁やき座をしめて銘々諸肌くつろげて已に斯ふよときはめし折柄暫時くと立出来る小南五郎右衛門只今橋詰十居横田川谷四人の者墓參の願如何にも不審しき有様故後お付け忍びきて見れば案に違はぬ自刃の覺悟何故有て此有様ハ、御推量下され十一士を先だて何面目に存ゑんと詞を揃へて云ければ小南制して申には今關東の戰の折柄に命なされへ關東へ馳向ひ花々しき戰爭なし君の馬前で打死せば十一士へも義務も立君へ對して二度の忠臣と詞ばを盡し理を盡す實

小南の奥床しく論せる詞今更に夢の覺たる心地なり之より君の御心を安んせん御安堵あれと詞のはし實に頼母しく見にけるいつの間にかは忍びけん顯出たる大盜賊鈴木代助丹後靜海たんびら引拔大音上ヤア土州藩の腰拔武士追腹杯とは眞赤な偽り又重役の馬鹿づら小南なれ様の先へまはり隠れ居るどもしらぬたわけめ日頃の意恨晴らしてくれんと合圖の磔投げつければ手下と見へて彼方より顯れ出たる數拾人前後左右へ詰め寄たり小南見より聲高くヤ、一寸才なり大音生ソレ各々と下知すれば應と答へて兵士の面々拔手も見せず切付ればひるまぬ盜賊ヤア何ひろくと代助靜海手下も供に秘術盡し戰ふ中小南焦て大音上奴彼等關東よりの廻し者生捕つて糺明せんと四人一度に大刀投捨て大手をひろげ待かくる透間もあらせす突て懸るを事共せず強力無双の土居川谷取ては投付けなげ飛しなんなく代助靜海をいけぞつたり。こわいなわぬと手下のもの。いのち限りに。にげて行何處迄もど。ねつかくるを小南見るよりコレ々またれよ。たかがしれたる木の葉とふかく其儘に。うちすてたかれよにつくさわ二人の此賊頭と代助靜海をハマトねめつけ。やいなんぢらわ徳川の軍師にたのまれ京洛中を燒きはらわんとせる大悪人いかしたいてわささくくの軍のさまた

げこの大石を脊にをわせ大海へしづめにかけて鮫の糸じきになさんすと。いさみて海へ投げ入れけり。かゝる處へ四人の妻子夫や父にわいたさに道を尋らばす馳せ行とたん。おもむす見合す顔と顔のふなつかしや父上様ヲ、我子とゆうばかり。あどわ涙の雨やさめ。くもりがちなる空もよふ暫時晴れ間もなかりける盛輝よふく涙をばらい父に向ひて兩手をつき今朝細川の屋敷をまいり對面の儀を願ひし時重役の申さるゝには此度朝廷より出格の御詮議を以て寛典の御所置を給り直様立歸しと聞くられしは再び御對面を申と云は神や佛のね蔭ぞと申上れば父盛義は親なればこそ子なればこそ長の旅路の艱難辛苦も厭なく尋ね來て父に對面致すと云はハテ満足ぞや嬉しいや併し將來の事はよくかんがへ居よ武士たる者は死すべき時に死せざれば死に増る生恥ぞや父は是より關東へ馳せ向ひ花々敷合戦なし君の馬前に討死し二度の忠義を顯はさん其時こそは其許も母も共に悦べと。いゝは盛輝げにもどうなづき不肖なる某しなれども忠孝の道わ兼てしる。いざ御供仕り朝敵ばらを打亡し高名手柄を顯わして父上の名を世におげん。さらはくどけなけにも勇てこそわ見へにける。そはなる常太郎わ。おとなしく父に向ひ私が國許出立の時かゝ様のたつしやたわ

百日が其わいた鏡川にて身を清め祈誓をかけると聞きましたたが天神様の御利益にて今御對面申すとうわ私しや嬉しいく早ふれ歸り遊はしてと幼心のいたわしさ外所の見る目も哀れなり傍に聞居る小南は何日まで云ても盡せぬ事早々國へ歸陣あれと詞に従ふ一同は打連てこそ歸國する

泉州堺烈舉實記忠義之鑑 第九回 南會所の件

定なき世も明暮て武士の生死の堺に散残る九士も今は寛典の御所置を請て歸らんと芦が散る灘波の浦を船出して長き海路も穩かに時しも彌生の十六日一同無事に劔太刀土佐の浦戸に着にけり佛奴を討たる勇士の姿見んものと寄り集たる人山の中を徐々打通り豫て上意の有ければ南會所に出にける待間程なく小監察下横目左右に従へ威儀嚴重に上座に直り居並ぶ九士に目禮なし今日一同呼出せしは朝廷より御沙汰あり此度渡川限り西へ流罪仰せ付られ候事此度大守様御ふくみ在らせられ候て實子これある三人は其悴に於て以前の通り家名相續仰付られ徒士に召抱へ候事實子無之六人は配所に於て御介捕扶持宛て遣れ幡多郡中村

御藏にたいて渡しつかはされ候事但袴太刀其儘を以て罷越の儀くるしからずとよみ上れば
 かつと怒る九士の面々互に顔を見合せて暫時言葉もなかりしが席を進て民五郎コハ心得ぬ
 仰を承るものかな彼塚事件たる決して吾々の暴舉に非上の命を受けて其本分を盡したる事
 なり去により去る二月廿三日長期にたいて無罪に所せらるべき所なりしも時世を慮り忠義
 の二字に對し露の命を果さんとて妙國寺に於て屠腹の場合十一士迄すてに見事切腹なし同
 く供々の其場にて名譽の最期をどぐべきを強て切腹さしとごめ程なく御宥め歸國仰せ付ら
 れたるに今日更に流罪の御所置わらんとはイヤモ一驚入つたる次第で御座る左程重き者
 ならば死せし十一士と諸共になせ仕置にされずや死を止めむさい迄も云渡したる其後に
 又流罪なきとは始終其意を得ず何時迄も忠義の赤心斗らねど出格寛典の御所置にて士格御
 扱ひにまで仰せ付られし事なれば最早罪科の御沙汰在るべき筈なき身分なるに斯る御所置
 に及べる必深き子細有るべし又私共に於て重罪有べきに候へば彼白籤組の者共同様所罰相
 蒙る譯なるに彼等は一点の御咎もなきのみならず却て勤務仰せ付られしは尤もふしんの事
 さらすや右の條々伺達さる其中は容易く御請致し難きと憚る色なくのべければ其方共の申

事尤至極には存せられども是には深き子細の有事先づ近うく其方共の知如く内には徳川の
 亂戦有り外には夷敵隙を伺ふ實に安危の懸る所なれば我殿様には種々御心痛わらせられ其
 方共の心底百も察しは察せられたれと斯ては國の爲ならねは深き御含みあらせられての只
 今の御所置厚情の程推量あれ例令流罪とは申ながら決して長き月日にもあられは暫時の
 間何分共耻を忍んで御請有る様致したしとの事を別たる申開け流石勇士の面々も君の情け
 の深きに面じ切腹なしたる十一士の苦痛の程を思ひ出てるるの涙れしぬぐひ事をわけた
 る段々の申開け一統納得仕ります斯る子細の有からは何條拒み申さんや御上意御請仕らん
 早速承畏仕りければ然らば御請け致さるゝなど何れもの心底察し申す此方も覺へキ落涙致
 したさらば是より出立ん各御用意しかるへしと心を奥に入にけり忠義に凝たる九士の面々
 勞れし足を踏しめて勝手をさして入りにけり折柄來かゝる盛輝暫時く此度御歸國遊ばさ
 れたれば御出むかひに参りし所又々流罪仰せ渡され候趣さ如何なるわけに候哉ヲ、ソナヤ
 盛輝よな此父等出格寛典の御所置を請けし吾れく九士汝等がふしんは尤もなれは是には
 深き子細有りて渡川限り流罪の仰せ唯今出立致す處父上の御詞共覺へキ此度塚表に於て佛

奴を討つたる土藩の働き全く皇國の御爲にして決して僥倖のふるまいならず一度は國難を
 すくはん爲切腹仰付られたれど固より罪なき者なれば頓て寛典の御沙汰在りしは理の當然
 夫に何ぞや再び流罪の御所置とは無法と云も愚のなり此盛輝眞以て合点まいらん何故御請
 致されしぞ此盛輝なれば決して御請は致しませぬと親を思孝子の詞怒りの眼玉なす涙ハ
 々不便と思へばナ、げに其元の云通り何日や十一士の墓前にて追腹切らんと致せしとき
 忠義に厚き小南殿僅かの義理を立負き切腹するは夫死同然今關東御征伐の折柄なれば命を
 ながらへ忠勤を盡す事こそ當然ならめと事をわけたる御論實尤の仰かな何惜からぬ命にも
 せよ一旦助りし上からは今すつへき時ならず一度國に歸り機を見て再び關東の戦に身をば
 投げ出し花々敷功名して君の馬前に討死し彼の世に於て先立し十一士に面會し死後れしわ
 びもし此世の耻を雪がんと思ひし事も水の泡命長ければ耻多し此期に及んで遺憾千万去り
 なから吾等一同此所置を不當と認め荒がいしても鳩蟀の争ひを鷹が眺むる今の時節國家危
 急の秋なれば特別の御取扱皇國の爲に死すとも恨みなさ此身彼の十一士と諸共に死せしと
 思へば夫迄の事例令吾れ配所の土と化するとも未練の振舞在まいぞ特に後目相續をも許さ

れし事なれば益々君に忠勤を盡し一人の母に孝行をせよ始終を聞て盛輝が落る泪を振拂ひ
 忠義の爲には命を捨て耻をも忍ぶは武士の習ひ誠や今は國家の多難の際彼夷敵敢て恐るゝ
 に足らずと雖も内には徳川の亂戦あれば一步を譲るも詮方なし斯る事の分りし上は盛輝
 も武士の片われ決して未練は申ませぬと流石勇士の親と子が口には云はねど心には逢ふは
 別れの始めかど出さじとすれど溢れいづ涙に袖をうるはふせり始終の様子を聞し常太郎モ
 一シ父様夫ならお前も流罪とやらで遠い所へ行のかへ常太郎そらやマアいかい苦勞する事
 であるのふ父はよぎない事により遠い所へ行ねば成らぬがいた後でも泣事はないやか父
 は戻る程にねとなしうして待つておよふぞア一夫なら父様わたしや長人して待つて居
 ります故早ふ戻つて下さりませオ一利口なやつ可愛やつ併喃父が戻りがれそいとてかな
 らず心配すな母と二人が氣長うによふ氣をつけて煩はぬ様父が戻りを待つて居よナントよ
 いかど口には云へど心には是が親子の別れかと骨もどろくる思ひなり暫時涙に暮れ居たる
 れ袖は傍に摺よつてモーシ都築様お前や張流罪のへ今朝書置と黒髪を添て越せし其時は最
 早此世になき人とまた墨染には纏はねど髪切れるし此姿香花を手向けて回向の中貴方等九

人は御ふじにて歸ふしと聞しやまひよつと夢ではないかと思はすこゝへきて見れば早配所
 への御出かけとはあんまり酷い浮別れ斯ふとは白髪の父母様まらわびして御座りませう一
 度はお歸り遊して二親様にとつくりと逢なされて下さりませせ其時御出なされては後に殘
 りし母様のねなげさ思ひやつて下さりませとふぞすこしの御猶豫を此世のね願叶はず私
 しも一所に行たいと女心の一筋に取亂して予見へにけりふ便と思ひ頼業が聲荒げてそなた
 も武士の妻でないか君國の爲に命を捨る人さへ在に配所如きに別れを惜心得がたしさに
 泉州堺にて切腹せしと聞しとき尼とならんとさためしそち餘りと云うも愚なり武士を武士
 と立抜ねば未來永々妻でなし夫やあいでジャト申て是がマア十八年の昔より親と親との云
 身昨日のふちも今日の潮と定だめなき浮世多と思ふてくらす其中に都へれ登りなされてよ
 朝夕祈る御身のふじ其甲斐有つて今愛にね目にかゝるや懸らぎに仮令御國の爲じやとて
 罪なき人々此様に無理非道なる御所置とは聞へぬはいや胸然な私しやなんばふにもやりは
 せぬと夫のひざに取付てワット斗にむせび泣心を察役人が時刻延びれば上への忠最早乗
 船然るべしと云ふに一統卒罷らんと立上る是が世に云ふ牛別れかと思へば誰か答へ得んや

らじとすがる妻や子の手を振拂らい／＼行んとすれば又すがる引つ引れて稍しばし各行れ
 いとせめたてられ名殘惜しくも幸領の詞に詮方泣別る人間万事塞翁が駒悦び在れば愛ひあ
 り昨日の愛も今日の悦ひ此有様を今爰に九士の上にて見れけり焼野々雉子夜の鶴子を思は
 れはなさのみか妻戀ふ秋の鹿すら有るに況して縁ある妻子の別れなどか惜まぬ事やる只儘
 ならぬは武士の身の上幸領共に促され是非なく船に打乗りて何れも健に御縁も有らば重て
 逢ふいふさらば爺様早ふ戻つてよと云心根を察し遣りたる一同が一度にわつと泣沈船頭急
 げと幸領が夕日を見て行人の陰見へぬ迄延上り々オーイ々と呼聲も最と哀れによわり行

泉州堺列擧實記忠義之鑑

第十回

川谷重政幡多郡 配所にて病死の件

秋暮てまだ散殘る薄紅葉赤さ心の大丈夫の昨日と今日の飛鳥川水の流も年々に移り替れる
 星月の重さ病に身は瘦て今は昔の色もなく香も失せて松の雪も落れば同川谷が重さ枕に寄
 纏り人目なければをりにふれ苦しき息をホット突さア、我ながら淺間しや俱に生死を誓ひ
 し十一士には先立れ國の爲には果すして斯る配所に嘯て病の爲に惱まされ露の命は保とも

所詮ながらふべき命空死せしと聞ならば後に残りし妻や子がさぞや歎げかん去りながら武士の意氣地にからまれてじつと耐ふる辛抱は熱鐵を呑む心地ぞや子を思ふは親心皆一筋の間の道迷ふぞや遠く共我心を推量してたつた一人の銀松を行末立派に出世させ我名迄も汚さぬよふ是か此世の頼みそやと鬼をも挫ぐ川谷も恩愛縁にしめ付られ男泣にうふし沈様子立聞盛義有道都榮三人共に一間を立出て病人の枕邊近く差寄て重政殿には御氣分あしくは御座らぬか我れく斯迄付添上は追付平癒いたすへし花咲春の其頃は一同俱に御免蒙り久敷見ざる故里も再び見んと思ふなり其時は此悲しみも昔語りとなりぬべし心安かれ重政殿氣分を儘に川谷氏と何日もかわらぬ詞のうれしさ我を忘れて重政がア、忝ないく何時も替はらぬ御深切なる各の其れ詞最早叶はぬ此病體今日迄存らへしは偏へに氏等の志此世に於て御厚恩の万分一も報ひがたし仮令此儘死するともいかてか忘れ申さんや去るにても此重政遂に配所の土となるとは扱もく知らざりし斯る偏士の賤が家に軒もる月を見るにつけ我等が身には斯迄も霧や霞や浮雲の斯る歎を見ると云ふも恨重なる佛奴の爲とは云う物の今更に死する命は是非もなし只此上は死後の事呉れく頼み奉る頼むと斗り流石に

も猛き大丈夫も弱りはて男泣に伏沈折柄向ふへ妻と子が早や遅しと走り付けね頼申升々と音なへば土居橋詰武内も立出向へば私は夫重政が病氣と聞及び晝夜の差別なく漸々只今参りましたア各様夫重政が長々の病氣に付きさうかし御厄介相かけましたで御座りませう我夫は何處に居らるか逢してたべと云はれて三人は氣もろろ云へき事は海山にも譬へかたなき重政殿長の月日の病さへ日々に重りて枕も上らずたべる薬も驗なく今日は死るか翌は消るか風前の燈火敢果命も今端際片時も早く御對面といたはり手をひき幼子を抱上げ先きに立て件ひ入れて川谷か枕の邊へつれ寄て川谷氏れ心儘に暫時の間重政お松殿にも遙く爰へ氏を尋て子供諸共参つて御座れば何事も申置事有なれば此世の名残何れもどもに惜まれよといふより早く妻は堪らすすりよつてコレもふしお松で御座ります途たのつたと斗にて涙ながら介抱に妻の貞心通てや重政目をひらきた松は何處にと云をも待すしつかと抱さしめコレた松で御座りますく悴銀松も傍に居ります云たい事か有なればわたしに云て下さんせくコレ申重政殿我のふと腔張り上げ呼けれと無常の風の誘ひ來て惜しや此世を秋の風あへなく息は絶にけりた松は詮方泣々も夫の死體に取付て思ひ出せば今年の

春泉州界へた尋申て参りし時君の爲に死なねばならぬとになりつらひに別れ致してより
 思ひ回はせば此子程因果な者か世にあるふか生れてから一ト年に成るやならず父親に別
 てより此母が手汐にかけて育てあげ三ツ四ツに成もせばと、様戀しと嘸や〜尋迷ふて御
 座りませう魂魄此世に留まれば草葉の蔭から呉れ〜も立派に成人さしてたべなるふ事な
 ら今一度物云うてたべ我夫と眠れる如き死顔と打守り〜今端の際に只一ト言銀松何處に
 と云はしやたか夫れか此世の別れに成たかいなど身をもかき聲も惜まず泣けるはふ便と
 云も愚なり傍に見て居る人々も保ち兼たる但涙悲歎に暮て居たりしが漸々涙れしぬぐみ其
 歎けきは尤もなから何日迄いうても返らぬ事せめては後の亡體をなりと野邊の送りを營ん
 と云ふにね松は猶せさあげばんに思へば今迄現の中の夫婦合此子諸共塚迄海山越て寒空を
 通る〜尋ね迷ふて至りし時折角な顔を見なからも其日御切腹なされるとのお詞此期に及
 んで是非もなし思ひ諦め國へ歸り母上始め此子を立派に守り育我亡き後を吊へとのね詞ば
 を守り詰め御最期をえ見届けも申さず其儘國へ歸りてより二月廿三日を忌日と定め香花を
 手向けて回向のうち朝廷より出格寛典の御所置を賜はり首尾能く御歸國成されしと聞たる

時の其嬉しさは飛立様に思ふをりから又々殿様の御含みにて當地へ流罪仰付られ配所へ参
 りて重病の赴きた手紙賜はれと長の御留守の其後で母上様御不自由な浮目見せぬか孝行と
 いろ〜諸色の取調へなしてより長の山道たせり来て長い別れをする事か逢ふと其儘死別
 れ前世如何なる報ひかと返へらぬ事を繰返へし神も佛もなき世かど其儘そこにどふとふし
 前後ふ覺に正体なく伏し沈む其場に居合し一同も夫婦の情を思ひやり保ち兼たる俱泪前後
 もわかず歎さしが折柄一間の中より宇賀祐之進出來り形を改め橋詰金田岡崎川谷垣内土居
 横田武内兄弟の人々此度御目付方より御用の赴き之あり來る霜月廿五日より向々右の役場
 へ罷出らるべしと一書を渡したればハット斗りに押戴は扱は我れ〜の冤罪の雲霧も晴れ
 マン嬉やと云者の悲しい事は重政殿配所の土となりしのとぞる涙に暮ければ心を察し祐
 之進返らぬ者は是非もなし重政殿の亡體は此祐之進葬儀營參らせんね松殿は居残て夫の追
 善七々四十九日の其間念頃に吊ひ賜ふが夫トへの操又右に申せし方々は御目付方より御用と
 有れば早速此處を御立有れといへば一同がハ、ハット皆々御請なしながら重政が體に向ひ
 ひさまづき香花を手向け生たる人に云う如く只今御目付方より御用の赴之あり無實の難も

今こそ晴れ貴殿存命なれば手を携へ故郷へ歸るべきにア、是非もなし扱は界にての冤罪も今こそ晴るゝ事ならん其時の功勞も今ぞ殿様より恩命下り士格御取立の事有るを假令此地に死する共名は万代迄も傳はらん此世冥途とへたつれと魂は宙宇留まれば我等が申事聞るべし南無阿彌陀佛くとむぐらに向ひ合掌し回向の折柄村人共打奏れて申上ます誠に川谷親にもふ慮の御病死さぞかし御愁傷と存じます是も前世より約束事と御諦め後々大事になされかし且つは御一同様には一ト方ならぬ御世話と存じます儲は各々様方には國家の爲め御身盡しの功勞も歸つて冤罪を身に請けて今迄艱難辛苦をなされたれと終には晴る野地の時雨今晴れ渡る雲霧も故郷へ歸る錦の袂祝ひ申て御見送り申さんと酒肴を携へ村の者老若男女打集御餞別の爲め御祝申さんと祝ひ祝をた其末に故郷へ歸る一同は村人共に打向ひ同音にて去らば是にてお別れ申さん然らば御立申さんと後より續き中村の町外れ迄見送られ然らば是にて御暇仕らん我れ配所の御地に長々御厄介相かけ御禮は口にて述べ盡されず御縁が有らば重ねて御禮申上げん先は是にて御暇仕らんと云へば村人共は御一同様随分御無事にてと別れ惜む袖袂心残して立歸る

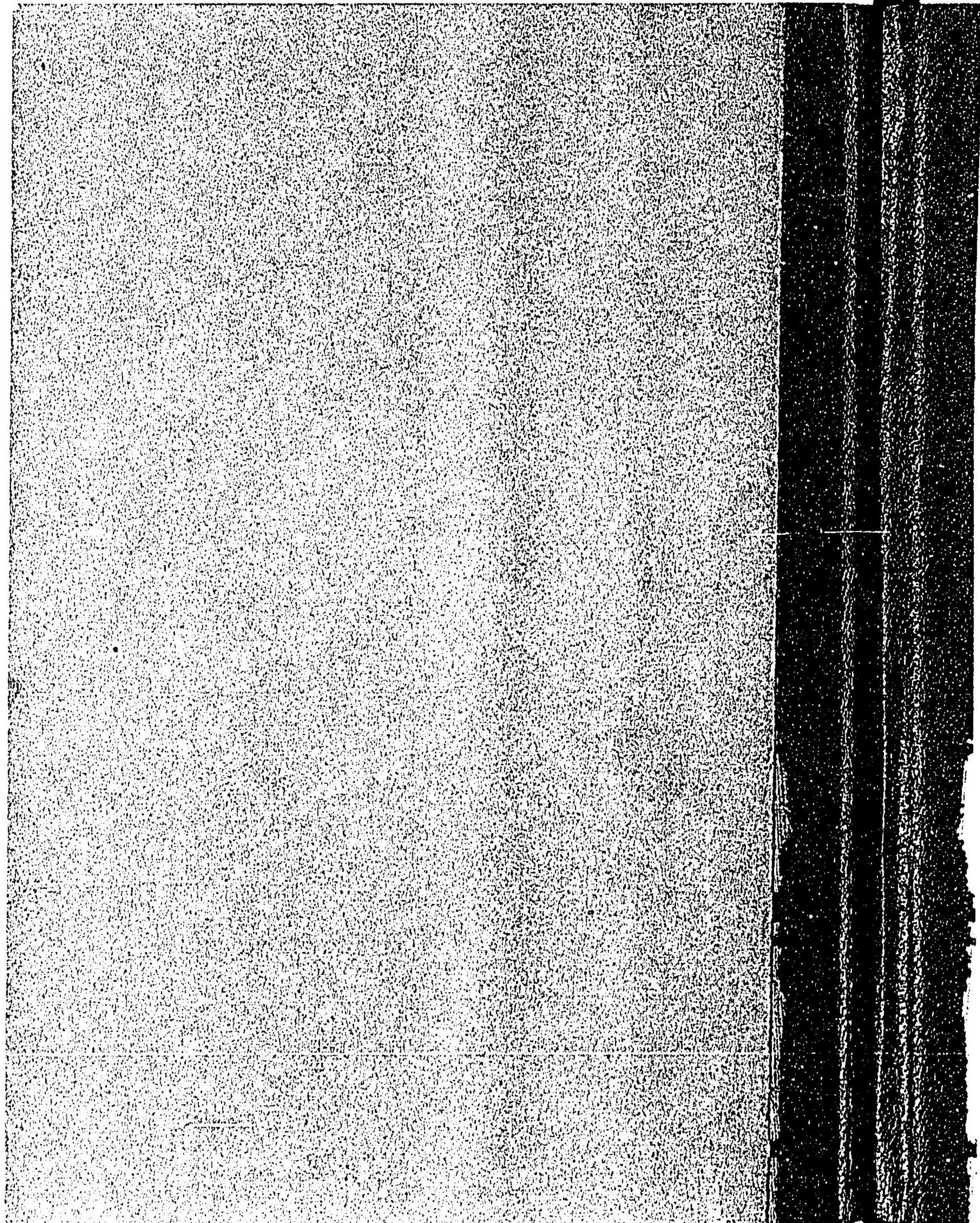
明治四十年三月十四日印刷
 全年 全 月廿一日發行

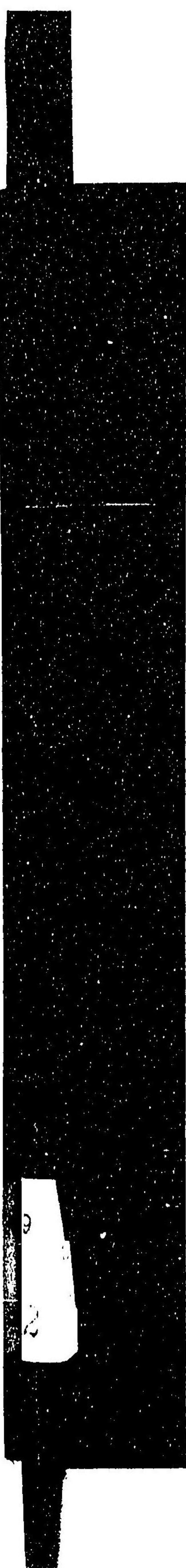
編輯人 川谷正次

高知市中島町五十六番地士族
 印刷發行所 土居盛義



J-15





9
2

泉州堺烈挙實記忠義

の鑑

川谷正次

国立国会図書館

001912-000-5

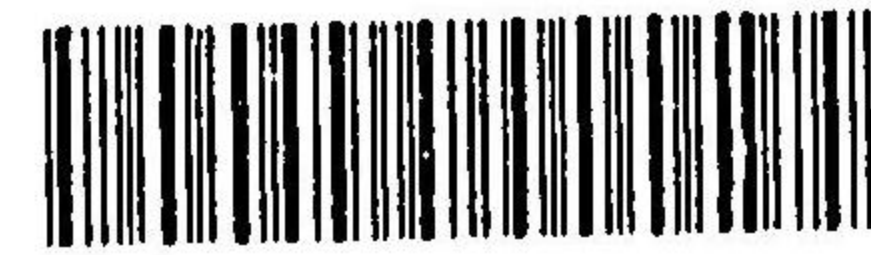
特49-742

泉州堺烈挙實記忠義の鑑

川谷 正次/著

M40

ACB-4844



特

7